同志社百年に寄せて

堀内　実

私と同志社は、私自身わずか四年間在学しただけなのにその後色々関係が深くなったのです。その四年間は旧制の中学で、私の学年は四年生と五年生が一緒に卒業したという、あとにもさきにもない学年でした。終戦直前で動員の伊丹の工場から卒業式に学校へ帰り、翌日又工場に戻ったような頃でした。

終戦後、東京歯科大を出てすぐにアメリカのニューヨークで一年間小児歯科を専攻し、翌年ボストンの児童歯科医院へ来た時から又同志社と近くなった様です。新島先生がはじめてアメリカに上陸された港ボストンに、こんなに永く住むとはその時は思いもよらなかった事でした。私もそろそろボストンへ来て二十五年にならんとしています。その間色々な方々がボストンを訪れて来られました。歯科関係（マサチューセッツ州小児歯科学会長―一九六六～一九六七）、ロータリー関係（ニュートンロータリー会長―一九七〇～一九七一）、京都市関係（ボストンと京都は姉妹都市で、現在ボストン側の委員会の副会長）、同志社関係（校友会ボストン支部長）等の方々が訪ねて下さいます。中でも同志社の方々が来られる度に、日本における同志社の発展ぶりを聞く事は、私にとって大変うれしい事の一つです。又、その方々のお伴をして、色々新島先生の関係深かった所を訪ねる事が出来るのは、大変に幸せな事です。

有賀鉄太郎先生と一諸にアンドーバーニュートン神学校を訪ね、デーンダブニーの案内で、ライブラリーにある新島先生の記念品やお手紙等を拝見し、当時の先生の御苦労を偲びました。又、村田竹次郎元校友会長と一緒にアーモ

スト大学を訪問し、ジョンソンチャペルの右正面にかかげてある新島先生の肖像画を拝見し、戦争中でもそれを外さなかったというお話を聞き感心しました。又、当時のコール総長宅へ昼食に招かれ、コール先生から、「この食器は新島先生在学当時から、歴代の総長が使っているもので、きっと新島先生もいつかこの食器で食事をされた事があった筈です。」と言われ感慨無量で食事をしたことがあります。その後も同志社からの方々を御案内してアーモスト大学に行きますが、あの時の事はいつまでも忘れられません。

ボストン近郊には、種々新島先生や同志社に関係の深いものがあります。当時のハーディ船長宅もボストンで有名なビーコンヒルの一角にありますが、この間火事のために中を大分ひどくやられたようで残念です。

私が小児歯科専門で開業した所が、アンドーバーニュートン神学校のすぐそばです。学校は小高い丘の上にあり、私の診療所はその丘のふもとで、ボストンから来る電車の駅の前なのです。もちろん、先生が行かれた当時の学校はアンドーバーという所ですが、今はその学校とニュートンの学校が一緒になり、ニュートン市にアンドーバーニュートン神学校となって残っています。今でも時々同志社卒業生がこの学校に勉強のために来ています。

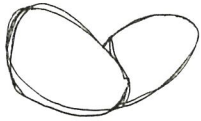
はじめにこの原稿は同志社創立百年祭に間に合うようにとの事でしたが、ついにおくれて今になってしまいました。百年祭は大変盛大に行われた由で感謝な事と思います。しかし国鉄のストで大勢の方々が参加出来なかったとか聞きました。残念な事ですね。アメリカも今年は二百年祭で、あちこちで色々な行事がありますが、中でもボストンはアメリカの歴史の発祥地と言われているほどの都市のため、全市をあげて種々な催しものがあります。ボストンマラソンのある日(四月一九日)があの独立戦争の始まった日です。今年は船橋京都市長一行もその日に来られる事になっています。

アメリカは二百年、同志社も創立百年から二百年に向かって、ますます発展されん事を心より祈ってペンを擱きます。

(昭和二十年中学卒・同志社校友会ボストン支部長)

母校英文学科から起った
エラン・ヴィタール小劇場

行方薫雄



母校百年の輝かしい歴史の中にあって、小さい事ながら、特異なことは、日本最初の小劇場であるエラン・ヴィタール小劇場が、同志社大学英文学科学生の芸術運動から始まったということです。それは大正七年のことですが、専門学校から大学になったばかりの英文学科学生はごく少数で、大正六年卒組は僅か三人で、うっかり欠席すると、授業に先生が見えても、学生は一人もいないという申訳ないことも起るので、彼等は翌日の出欠席についていつも打合せをしていました。翌大正七年卒組は十人（予科の時は二百人位あったが）、自然、少数精鋭という結果になり、教授と学生、また学生間の交流が親しく、いわゆる切磋琢磨がよく行われました。当時英文学科主任教授は、直読直解式訳法で有名だった浦口文治氏、外人教師の主任は、ハーヴァード大出身のロンバード教授でした。（後年ある知名な演出家が「ハムレット」を上演する時、台本は坪内逍遙訳を使ったが、原文をよく理解したい時は、浦口文治氏著「新評註ハムレット」を参照した。あの本は評註が非常に詳しくよい本だ、と語られたのを聞いて、さもありなんと、母校と先生をなつかしく偲んだこともありました。）ロンバード教授のシェイクスピア劇の授業の仕上げには、学生がパートを持っての暗誦から演技に及びました。同級生田辺主計君のマクベス夫人の好演技は今でも目に彷彿しているほど素晴らしいものでした。（これも後年、大正十二年英文学科卒高橋源次氏が、「前明治学院大学長、文学博士、高橋源次先生」として静岡県高校英語研究会に迎えられて講演した時、講演中にはイギリス留学中の話しが多かったが、あとで私との対話では、ロンバード教授の存在を高く評価されていました。）

留学から帰ったばかりの若い園頼三教授（故人）の「最近の芸術思潮」は、文芸の創作活動に興味を持つ学生に強い影響を与えました。そうした学生の内、大正六年英文学科卒鈴木三郎（故人）、福原久造（故人）、七年卒行方薫雄、神学部の大島豊（故人）、神学部から京都帝大英文学科に転じた野淵昶（故人）らは田辺主計の家に時々集まって、レコードを聴き、或いは自分の創作を読み、或いは感想を語り合いました。

彼らは園教授の影響で、ベルグソンの「創造の進化」の生命の躍動こそが芸術創作の根源であると信じて、このグループをエラン・ヴィタール協会と呼び、内に燃える生命の焔をかき立てて、活動を起す機会をねらっていました。

その第一回講演会を、一九一八年(大正七年)二月二日午後六時半から、同志社青年会館で開きました。その時のペン書きのプログラムは、

一、序詞　林敬直（大正十年英文学科卒、当時予科在籍、故人）

一、英詩壇（ヴィクトリア朝以降）　鈴木三郎

一、絵画と音楽との交渉　園頼三教授

一、近代音楽数種（蓄音機使用）　田辺主計

挨拶には、「新しき酒は古き皮嚢に盛ることは出来ません。若い者の心は、古き因襲に囚えられてはなりません。何物かが常に心中に醱酵している我々は、事毎に不満を感じます。大きな声で叫びたい」とあります。

鈴木は学究的、田辺は繊細なみずみずしい感覚を持つ詩人肌、真摯な中にほとばしる激しい情熱は、何か新しい芸術運動が起ることを予告するような期待を、聞く人に与えました。

次いで自分たちの考えを最もよく形象化するため、講演より更に行動的である演劇をやろうと考えました。野淵昶、福原久造は、アイルランド演劇の研究をしていたし、大島豊は北大林学部出で、信仰から、青山学院を経て、同志社の神学部に入ったもので、しばらく文芸協会（坪内逍遙主宰、明治三十九年――大正二年）にいたこともありましたから、演劇が取り上げられるのも自然の経過でありました。当時は、ドストエフスキーや白樺派の作品が青年によく読まれていましたから、白樺派の武者小路実篤の「未能力者の仲間」を取り上げ、大正七年四月、同志社青年会館で上演しました。その時のプログラムは、

第一部　武者小路実篤作

「未能力者の仲間」一幕

配役

先生　野淵昶

A（学生）田辺主計

B（同）行方薫雄

X（宗教家）大島豊

小使　川村正太郎（大正七年英文学科卒）

第二部　懇話会

司会者　福原久造

でした。懇談の際に京大の新村出教授、三高（後に京大）の成瀬無極教授、京都日の出新聞岩田記者、毎日新聞神田記者から、非常に期待をかけた激励があり、再演を勧められた。素人らしい素朴な、内面の表現に真卒さがあり、一杯の熱気が場内に漂った。勿論演技は稚拙であったが、本質を探究する謙虚な率直さが、かえって魅力となったようです。呼吸までも感じられる狭い部屋で上演するよさがあった訳ですが、せりふの充分にはいっていない大島君は、見物からは見えない欄間の蔭にはっておいた、大きい字で書いたカンニング・ペイパーを盗み見できなくて大弱りしました。彼は創立記念日の前夜祭に、チャペルで、「ヴェニスの商人」のシャイロックを西洋歌舞伎のような大演技でやってのけ、人気を沸かせたけれど、今度は冷汗のかき通しでした。それもそのはず、エラン・ヴィタール小劇場は、まだ伝統のない新劇の演技を開拓するために、従来の歌舞伎、新派のように、型によって外形を作るよりも、自分で創り出した演技を探りあてる運動を始めたのですから。人間性を回復したルネサンスが、バック・

第三回試演後大丸ホール舞台前で撮影

第一列（向って左より）中堀愛作、片山春一、佐野篤、手塚竜麿、野淵昶、行方薫雄（野淵、行方は扮装のまま）、一人おいて、福原夫人、行方妹。

第二列　二人目、中村弥三郎、般川未乾、成瀬無極、有島武郎、新村夫人、大島豊、佐藤芳貧、林敬直。

第三列　二人目、福原久造、田尻一夫、一人おいて藤浦洸。

トゥ・ネイチャーをモットーとしたように、バック・トゥ・アマチュアをキャッチ・フレーズとしたのです。これはもっと後のことですが、アマチュア演劇の研究会の席で、茨木憲氏が、エラン・ヴィタールはアマチュア演劇の元祖だね、といったことがありますが、本当だと思いました。この試演の挨拶にもこうあります。

「私等はみな素人です。私等の芸術は幼稚です。そのかわり荒んではいません。本当のものを目指して第一歩を踏み出そうとして居ります。私等は群集や其他の情実のため汚されないつもりです。私等は努力します。クタバリません。どんな事があっても正しい道から踏外さずに進んで行きます。私等の中にはその力だけがあるつもりです。今はホントに幼稚ですが、その内に何か出来る事と信じて居ます。

此度「未能力者の仲間」を上演することにしました。私等は自分の芸術に期待を持って戴けようとは思えません。そう思うことは僭越です。まだ本当の未能力者ですから。しかしいつまでも未能力者でいたくありません。そのために努力を続けます。此度の試演で見限らずに好意を持って戴けば有難いのです。」

激励にこたえて五月十八日、同じ場所で、「未能力者の仲間」の再演と共に、同じ作者の「ある青年の夢」を上演した。未熟な演技を越える新鮮な活力が大きな魅力となって、来会者に非常な感銘を与えました。

大島豊は北大の恩師有島武郎氏を同志社の英文学科に招聘する下ごしらえをするうち、氏の紹介で、エラン・ヴィタール協会は、ロダンの小品彫刻を多数含む白樺美術展を催し武者小路氏が新しき村建設に九州に行く途次三条のＹＭＣＡで新しき村の会を開き、行方が司会をつとめました。有島武郎氏が同志社大学に春秋二回来講されることになり、第一回は、一般学生のためにチャペルで講演し、定期の講義は、当時の予科生を対象に行われることになりましたが、授業にも、知識の切り売りではなく、人間関係を大事にする人で

あることを強く感じました。大島はまた柳宗悦氏をも客員講師に招聘することに尽力しましたが、従って、兼子夫人のアルトを京都人が聞ける機会が多くなったことも、その功績の一つでした。

エラン・ヴィタール同人は有島武郎、生馬兄弟の講演会を、京大のYMCAホールで開きましたが、大阪朝日新聞の懸賞小説に当選して文壇にデビューした野村愛正が、有島氏の講義を聞くため来ていたのも講師に加えたため、聴衆をさばき切れない程の盛況でした。

同志社青年会館における二回の試演に、力強い激励をうけ、勇気を得て、はじめて外部で、外部に対し、公演といってもよい程大規模の上演を持とうと決心し、私の止宿先、椹木町堀川東入、佐野方を劇団事務所とし、着々と準備を進めました。すなわち、上演戯曲を秋田雨雀作「少年の死」(二幕六節)、同「三つの魂」(二幕)と定め、当時京都第一のローカル紙、京都日の出新聞に、岩田記者の尽力で、一頁をさいてエラン・ヴィタール号としてもらい、戯曲、作者、小劇場について、高倉輝、野淵、行方が書き、同志社青年会館で伊庭孝、野淵、行方の三人で、エラン・ヴィタール小劇場演劇講演会を開き、PRにつとめ、一方、烏丸丸太町にある大丸呉服店主の自宅を訪問して、同店催物ホールのステージ周囲を新劇舞台らしく設備し、ドン帳に、布でELAN・VITALの文字を縫い取りし、貸してくれるよう頼み、OKして貰いました。

いよいよ大正七年十一月十五日(金)、十六日(土)、十七日(日)の三日間、午後六時三十分より、日本最初の小劇場が、築地小劇場より六年前に、遂に幕を上げました。後年土方与志氏にお会いした時、「私は学生時代、エラン・ヴィタールに憧れていました」と語られました。小劇場というのは、当時アメリカで流行していた、三百人乃至五百人位の観客を収容して、細かい点までも表現し、舞台と見物とがよく融合できることを意図したリトル・シアターを訳したもので、素人が既成の演技を模倣しないで、劇場以外の場所で、新しい演劇を樹立しようとしたのです。プログラムに印刷した「趣旨」の中に、「本劇場はエラン・ヴィタールの芸術上の運動の一つです。私達は正しい劇場に向って進むものです。(中略)会費は経費の都合で不本意乍ら戴

新島襄研究参考図書

My Younger Days	同志社校友会
新島先生書簡集—続(森中章光編)	同志社校友会
新島襄の生涯(J・D・ディヴィス著・北垣宗治訳)	同志社校友会
新島襄書簡集(同志社編)—岩波文庫	岩波書店
新島襄先生(徳富蘇峯著)	同志社出版部
新島襄—人と思想(魚木忠一著)	同志社出版部
新島襄(岡本清一著)	同志社出版部
新島先生と徳富蘇峯(森中章光著)	同志社
同志社九十年小史(同志社社史史料編集所編)	同志社
雑誌「新島研究」	同志社新島研究会
新島襄(和田洋一著)	日本基督教団出版局

※比較的参照しやすいものを掲載

きます。……」とありました。そして会費は金三十銭でした。今葉書は二十円で、当時のは一銭五厘でしたから、今はおよそ一千倍とすると、三十銭の入場料は今ではおよそ三百円となります。金の話のついでにいえば、上演後、大丸呉服店は、設備の布代二百四十円の請求書を示して、それを無料にしてくれました。非常にありがたくて、古い京都に不思議に新しい事が生れるのは、それを高く評価して、これを助ける精神が行き渡っているからだ、とも思いました。

キャストは次の通りでした。

第一部　秋田雨雀作「少年の死」

配役

中学生（劇の主人公）　手塚竜麿（大正十年英文学科卒、当時予科在籍）

同　藤浦洸（神学部予科中退、後にNHK「二十の扉」に出演）

陸軍中尉　中村弥三郎（英文学科中退、当時予科在籍）

教師　行方薫雄

医師　佐野篤（行方止宿先の主人）

主人　佐藤芳資（市役所吏員）

その弟　飯義寿（大正八年英文学科卒、故人）

その娘　行方の妹

第二部　秋田雨雀作「三つの魂」

配役

長兄　野淵昶

次兄　福原久造

弟　行方薫雄

教師　片山春一（大正十年英文学科卒、当時予科在籍）

青年　林敬直（同右、故人）

次兄の妻　福原夫人

その娘　外部の人

第三の労働者　田尻一夫（英文学科予科在籍、故人）

装置　中堀愛作、船川未乾

私の止宿していた佐野篤氏宅には広い二階があったので、劇団事務所や稽古場に使っていたが、稽古の時に有島武郎氏、成瀬無極氏も見え、総稽古の時は竹久夢二氏も見えたり中々賑やかでした。なお劇団顧問として秋田雨雀氏、長田秀雄氏をお願いし、相談役には新村出氏、有島武郎氏、成瀬無極氏、後には厨川白村氏にもお願いしました。新村夫人、厨川夫人は、女優の細かい世話から指導もして下され、背景製作に庭をお借りしたこともありました。宣伝の応援をしてくれた伊庭孝は神学部中退者で、当時ローシー一座の歌劇団をひきいて京都に来ていました。当時は珍しかったトーダンスの高木徳子、石井漠、高田雅夫、原せい子、正邦宏等、錚々たるメンバーを擁していました。

野淵氏が同志社の教師になってからは、同志社の学生で演劇にたずさわった人は多かろうと思います。これまでのところ、英文学科出身で著名な演劇人には、山川幸世（昭和三年卒、東京舞芸学院教授、故人）、大岡欽治（昭和六年卒、大岡演劇研究会主宰、関西アマチュア演劇の重鎮）があります。

＊　＊　＊

（筆者　行方薫雄氏）
大正七年大学英文学科卒。
現在、静岡県演劇連絡協議会々長、静岡県文化協会理事、静岡市文化会議会長として活躍中。
現住所　三島市中田町五―二十二